まず手を洗うこと
小児マヒ予防は赤痢同様

発熱の症状

つぎに症状ですが、多くは三八—三九度あるいは四十度の発熱が三、四日つづき、熱が下る前後にあとでべるようなマヒをおこします。不明の熱がでていたんさがり、それから二、三日してまた発熱する場合もあります。

なお発熱期間中、知覚過敏になり、身体にさわると痛がることが多く（とくに手足を動かすと痛がる）また発汗が強く、嘔吐、下痢、喉頭をきたすことがよくあります。その他いろいろな症状を呈しますが、多くはかぜ、または消化不良症として治療をうけていて、そのうちにマヒに気づくことが多く、脊髄液に変化ができますが、実際問題としてはマヒをおこす前に診断を下すことは不可能といつてもよいでしよう。

マヒの程度もいろいろで、まつたく股がブラブラで晩緩性マヒをきたすものからだが行するものまでいろいろの段階があります。

まず手洗が大切

治療は特効薬のないことは前に書きましたが、発病二、三週の急性期にはできるだけ安静にして、マヒ局所の温あん法をして血行をよくし、最初の一カ月間ぐらい毎日腰椎穿刺をして、脊髄腔内に薬液を注入し、麻痺した神経細胞の再生をうながすようにします。その他いろいろの薬の使用が試みられています。

急性期がすぎてからはマッサージ、入浴、運動の練習などをし、またシーネをはめて奇型のおこらないようにします。二年間は回復の見こみがあるといわれます。親も子供も医師も根気づよくやらねばなりません。軽症の場合腰椎穿刺をつづけなくてもよくなる場合もありますが、全体としての完全治癒率は六〇—八〇%となつています。

さいごに予防の困難なことは前に述べましたが、ワクチンが普及実施されるまでは、赤痢などの腸管系伝染病の予防とまつたく同様で左記の点に気をつけて下さい。

(1) 手洗の励行、外出から帰つたとき、または食前に手を洗うよう習慣をつけること。
(2) 飲食物の衛生、とくに生水、生物に気をつけること。
(3) 蠅の駆除
(4) 暴飲、暴食過労の防止
(5) 早期受診の励行

などです。

涙さそう激戦地
右橋市議の沖縄視察記(4)

沖縄で忘れられないのは終戦まぎわの悲しい思い出だろう。それあらぬか内地から沖縄にいくとか、かなならず一回は戦跡まわりをやらされる。白梅の塔、姫百合の塔、健児の塔などいずれも若いつぼみのような学生を中心とした塔である。ここを案内者に説明をききながらまわると、目頭がジーンとあつくなり、こうべの下るのをどうすることもできない。戦争はもういやだと、心の底からのろいたくなつてくるのである。いかに当時が悲惨であつたかが、まざまざと脳裏に刻みつけられた。反面、島民の健闘がいかに凄かつたかを物語つているのだつた。

「遺族のかたたちはどうしていますか」と一島民にたずねたところ「戦争のことはもういつてくれるな。思い出すだけでも嫌だ。遺族といえば、島民一人一人が全部遺族です。もうたくさんだ」と語つていたが、これがいつわらぬ気持だろう。当時の戦場がそのまま目の前にみえるような錯覚さえ感じたほどだつた。このせまいところで米軍五万、日本軍十万、島民十五万が死んだ。ほとんど死体の山であつたそうだ。説明の人はこれをきいても激戦のもようが一応しのべるだろうと語つてくれた。

○…沖縄の諸物価はどうか……内地より三倍高いということです。とくに食料品が高い。たとえば、私は沖縄で昼食をとつたが、内地だと五十円ぐらいなのが、百五十円もとる。ビール一本が三百五十円、沖縄の百円が日本の三百円と思えば間違いはない。当然物価高のため通貨の値打ちがかわらないような気がする。

ただ都合のよいことは、ここでは子供の教育にはとても熱心で、とくに日本の大学を出ることを最大の目標にしているが、これは出稼ぎが多いため、どうしても学問をすれば条件がよくなるためである。金財産を投げうつてでも教育させるという一面をもつている。こういうわけだから、内地に留学する子供に送金するわけだが、百円が内地では三百円もの価値をもつているので、ひじように有利でありこれだけは都合のよいことであろう。

○…風習としてとくに異つているのは、墓地が財産ということである。先祖を敬うというあらわれが墓地にばく大な金をかける結果となつている。自分の住む家はアバラ家みたいにしていても、墓には惜しみなく金を注ぎこむ。ほとんどが十万円から五十万円ぐらいかけている。

日本では家を担保に借金するが、ここでは墓を担保にするということとは、一寸奇異な感じがする。或る島民にいわせると、先祖を敬う気持からだそうだが、これは日常生活の面にまで相当深く浸透している。

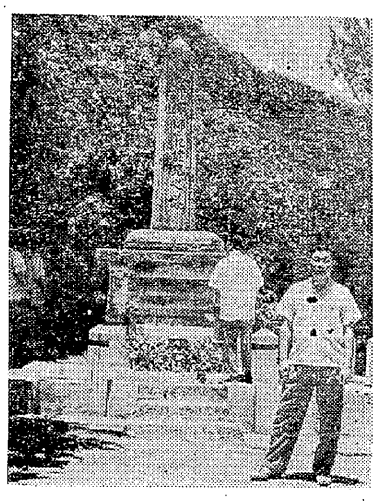
× × ×

以上四回にわたる私のつたない視察記は終りますが、こんど機会を見出して、皆さんにはなわしい報告をしたいと思つています。

〃あかつき〃発刊

三川支部の緑ガ丘団地域分会では三年来の宿願であつた地域機関紙〃あかつき〃の第一号を発刊したタブロイド二ページでキチンと整つた機関紙である。

編集にあたつている教宣部では、地域の特殊性をいかした機関紙づくりを目指しており、期待される分会員、主婦などの投稿をよびかけているがこんどの発展に期待がもたれる。


真写念記で前の塔の健児

〃わしのさまちやん
取らぼとれ
真の夜中の丑の刻
ワラの人形に五寸釘
わしが恨みでとり殺す
サノヨイヨイ
× × ×
〃唐津下罪人の
ズラひく姿
いかな絵描きも
描きやきらぬ

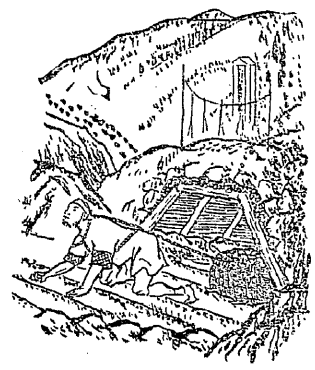
これは高島炭鉱で唄われている古民謡です。

高島炭鉱は徳川時代に佐賀藩に属し明治になつて官営から後藤象次郎、岩崎弥太郎と経営し現在にいたつている。

歴史の古さをほこる高島は、又一面労働者搾取の歴史に流血の血涙をにじませる「鬼ガ島」が通称であり、川筋男で名のとおつた筑豊方面の入坑男選でさえ、高島ときけば身をふるわしたという。

まさしく資本家からみれば炭鉱夫は「働く機械」であり、しかも圧政と弾圧のなかでは無限の馬力を発揮する道具であつた。

職制は絶対であり、女房を横取りされてもさからえず、ただ丑の刻詣りで恨み殺すという悲しいレジスタンスがその圧政を物語つている。「ケツワリ」と称する島からの脱走、それも到底望みはなかつたが、それでも何人か、何十人かの人々は海中最後の力をふりしぼつて、地獄からの解放を求めたのであるが、結局は捕えられ私刑にあい幾多の人々が餓死、撲死にあい、無縁者の白骨が累々と積まれ、いまもその名残りをとどめる「千人塚」がある。


（カツト）唐津下罪人のズラひく姿

× ×

〃みいけ〃夏季文芸募集

「みいけ」編集部では例年どおり夏季文芸募集を次の要領で行いますので多数ご応募くださるよう期待いたしております

△創作　四百字詰二十枚以内、選者＝真鍋呉夫
入選一席千五百円、二席千円、三席七百円

△詩　一人二編以内、選者＝中野秀人
入選一席七百円、二席五百円、三席三百円

△短歌（題、自由）五首以上十首以内　選者＝渡辺順三
入選一席五百円、二席四百円、三席三百円

△俳句（題、自由）五句以上十句以内
選者＝栗林一石路　賞金は右に同じ

△川柳（題、自由）五句以上十句以内
選者＝九里三作　賞金は右に同じ

△感想文（題、自由）主婦もふくむ　四百字詰四枚以内、編集部選　賞金は右に同じ

△児童綴方（題、自由）四百字詰二枚以内
編集部選　賞品進呈

△写真（題、自由）一人三点まで
大きさはキャビネ、編集部選
入選一席五百円、二席四百円、三席三百円

その他各種佳作にも謝礼進呈

※締切り＝七月二十三日

※宛先＝三鉱労組本部「みいけ」編集部
および各支部教宣部

※発表＝八月中旬「みいけ」文芸特集号紙上

【童話】
平助爺さんと黒

このごろ、平助爺さんは、めつきり、体が弱くなり、静かにものおもいにふけるときが、多くなりました。そんな爺さんを、いつもなぐさめてくれるのは、戦死したむすこが、大へん可愛がつていた黒でした。

黒が、まだ子馬であつたときは爺さんもいまのように、よぼよぼしていませんでした。腰もまがつておらず、目も、まだはつきりしていましたし、耳も、おばあさんが、小さい声で話しかけても、聞えていたような気がするのです。

それがちよつとした病気がもとで、おばあさんが、ぽつくりなくなり、黒が年とつて、だんだん弱くなると、爺さんの頭に、めつきり白毛がふえ、腰もまがつて、よぼよぼしてきました。

しかし、びんぼうな爺さんは、どんなに、体が弱つても、はたらかなければなりません。

そんなとき爺さんは、よく「黒よ!!お前もわしも、年よりぢやであわてんで、ゆつくり仕事しようなあ」と、のんびり働くのです。

仕事が、はかどらぬからといつて、黒をしかつたり、なぐつたりするようなことは、けつしてありませんでした。

爺さんが、黒をおもつている気持は、ちようど、戦死したむすこを、おもつている気持のようでした。それは、可愛いというより、いとしいという気持で、いつぱいでした。

今日も、爺さんは、黒とたんぼで働いていましたが、いつものとおり、のんびり仕事をしていたので、気がついたときは、ほかのたんぼで、働いている人は、だれもいませんでした。

せめて、このたんぼだけでも、しあげて帰ろうと思い、つかれている体に、むちうつて働いているまに、夕日は、とつぷりくれて、頭の上には、十三夜のお月さんがにぶい光りを、はなちはじめました。

やつと、しあがつた、たんぼを、ながめながら、立ち上がろうとした爺さんが、とつぜん、今すいたばかりの、たんぼに、顔をつきこんで、たおれてしまいました。

黒は、心配そうに、長い首をのばして、爺さんの顔をのぞきこむようにして「ヒイ、ヒーン。ヒイヒーン」と悲しい声をだして、いくなきながら、あとあしで、たんぼのあぜ道を、ぽつこぽつことけるのです。黒の切れ長い目には、涙さえ浮かんでいるようですが、爺さんは、たおれたまま、ちよつとも動きません。

黒は、何十回も何百回も、「ヒイ、ヒーン。ヒイ、ヒーン」と、なき続けましたが、だれひとり、すくいにきてくれる人は、いませんでした。

東の方の空が、あかるんでくるころ、たおれている爺さんをいだきこむようにして、黒も、たおれていました。

○　○　○

皆さん、ひまがあつたら、黒のお墓に行つてごらんなさい。だれがするのかしらないけど、いつもきれいに、そうじしてありますよ

映画
新しい中国を描く長篇カラー記録映画
新しき大地

【かいせつ】

昭和三十二年三月、牛原虚彦を代表者とする映画使節団が、中共政府周恩来総理の招待により北京に総理を訪問、後、中国各地を政府の案内で訪問した。その足跡は香港、除州、南京、浦口、重慶（武漢）、大連、瀋陽、長春、ハルピン、石家荘、徐州、柏州、広州上海にわたり文字通り中国を南から北へ縦断した。同使節団のメムバーの一人、映画技術者協会理事佐伯啓三郎が、それらの印象を二万五千ヤードの色彩フイルムに収めたものを総理編集したのが本映画で、牛原虚彦が監修、同じく行を共にした八木保太郎が構成したもの。

香港より北京までは鉄路による先ず、中共支配下の汽車の改装に驚かされる。急行列車に食堂、寝台車がつき、婦人子供専用車があり、幼児用のベッドが特設されている。

北京では周総理の歓迎をうけ旅程を協議した。紫禁城（故宮博物館）、人民体育館、人民広場——古い中国と新しい中国とが、そのままの調和を保つて存在する。人民広場では国慶節のパレードが、花やかに展開され更に中共軍の精鋭が行進する。毛主席の横顔も見える曾ては国民党軍に追われて、延安への大行進を余儀なくされた泥と土にまみれ、裸足で疲さにふるえ、大地を掘つて穴に雨露をしのんだ彼等が、今や最新近代装備を持つ大軍団と変化した。

北鮮に駐屯しボーチンミン軍を援助し、ビルマの国境を押え、パミール高原から印度平原を見下し、遠く埃及へ「義勇兵」を派遣しようとした大兵団だ。

東北三省へ更に鉄路を走る。瀋天は瀋陽となり新京は長春となつた。雪解けの道に旧満州映画協会の撮影所がたち、映画製作が活発に続けられている。広大な自動車生産工場があり、溶鉱炉の火が燃える。

再び北京——それから南京、中国革命の父孫文の中山陵の大理石の階段が真白く眼に泌みる。武漢の長江大橋も、既に完成した。鉄道、自動車道、歩道と区別された二層建の巨大な鉄のモザイク。詩文に名高い西湖の月も眺めた。そして最後には「魔都」上海の健康都市に変貌の姿が……。（十三日よりシネマセンターで）